

平成 2 年度

## 小学校低学年における新教育課程の基礎研究

～ 生活科を中心として～

川崎市総合教育センター 生活科研究会議

## 小学校低学年における新教育課程の基礎研究

—生活科を中心として—

生活科研究会議

田島 操<sup>1</sup> 岡本 紀子<sup>2</sup> 栗原由美子<sup>3</sup> 吉田 武<sup>4</sup>(平成元年度)  
岡本 昌司<sup>5</sup>(平成2年度) 矢吹 一世<sup>6</sup>(同) 佐藤 悠子<sup>7</sup>(同)

### 要 約

実践的研究が多い中、技術的な指導法だけの研究ではなく、生活科が設置された理念、子どもの発達の特長、学習指導要領をもとにした教科構造の分析、幼・小の接続・発展、諸外国の初等教育の現状と生活科との関連、3学年への系統発展など基礎的な分析研究を行い、生活科の学際的意義を明確にした。主に以下の内容が明らかになった。

①低学年の児童の思考発達は、前操作的段階後期から具体的操作段階前期へと発達段階が一段向上するちょうど橋渡しの時期である。特徴は、目の前の具体的な事物や行動を通して思考し自己中心性が強い。これらの特性を考慮した生活科の指導では、直接経験を重視するとともに客観的で多面的なものの見方をさせたり、日常生活の経験を生かすことが必要である。

②生活科の教科構造を学際的に分析すると、生物、物質、時間、空間、自己の5つの基本的概念の基礎と観察、製作、飼育・栽培、表現、予想、分類、遊び等の探究活動の基礎が導き出される。生活科の教材研究を行うとき、その教材ではどのような基本的概念と探究活動の基礎や基本的生活習慣が含まれているか分析し、単元構成や展開を考えていくうえでの指針となる。

③生活科は諸外国の初等教育からさまざまな影響を受けている。アメリカのキャリア教育からは自己概念を育てる教育を、ドイツの「事実教授」からは社会と自然を一体的に捉えることを韓国からは表現活動の重視などである。

キーワード：生活科、発達段階、教科構造、基本的概念、探究活動

### 目 次

はじめに	3. 幼稚園教育と生活科	56
I 主題設定の理由	4. 生活科の基本構造	57
II 研究のねらい	5. ドイツの初等教育と生活科	64
III 研究の方法	6. 生活科の指導計画作成の基本	65
IV 研究の内容および考察	7. 生活科の評価	65
1. 小学校低学年児童の発達の特性	8. 生活科の年間指導計画と展開例	66
2. 思考の発達と生活科の学習指導	V まとめと今後の課題	70

<sup>1</sup>川崎市立久本小学校教諭(主任研修員) <sup>2</sup>同 宮前小学校教諭(研修員) <sup>3</sup>同 南菅小学校教諭(研修員) <sup>4</sup>川崎市教育委員会指導主事 <sup>5</sup>同 総合教育センター研修指導主事 <sup>6</sup>同 <sup>7</sup>同

## はじめに

学習指導要領が改訂され、小学校低学年では社会科と理科が廃止になり、生活科が設置されることとなった。平成2年度から第1学年の移行措置が始まり、平成4年度から全面实施となる。戦後の教育改革以来、教科の統廃合は行われず、それぞれの教科において40数年に及ぶ研究の成果が着実に積み上げられてきた経過があるだけに、新教科「生活科」の誕生は教育界のみならず一般社会の人々にも大きな影響を呼び起こしている。とりわけ直接かかわる小学校の教師にとっては、その学習指導等のあり方などについて戸惑いと不安があるように見受けられる。

そこで、川崎市総合教育センターでは、新教育課程研究の一環として「生活科教育」の基本的な理念や学際的な意義について理解を求めて研究を進めた。これらの理論的研究については、『生活科授業づくりのために』という本になり、川崎市総合教育センターから発行されている。研究内容についてはこの本より一部抜粋したものである。

### I 主題設定の理由

文部省では、全国各地の小学校に教育研究開発校を指定し、さまざまな試行的実践研究を依頼している。それらの研究授業や研究紀要を分析検討すると、学校の研究ということもあって、指導計画作成に重点がおかれている。しかし、その指導計画のもとになるものは、文部省が学習指導要領を告示する以前に示した指導内容の参考事例が多いのである。その参考事例がどのような考えから作成されたかについての理論研究はほとんどなされていないのである。

本研究会議では、生活科の学習指導要領を中心に生活科に関する多くの資料により、生活科の学際的意義を追求した。その理論をもとに具体的な指導計画の試案を作成し、生活科研究の指針となるものを究明した。

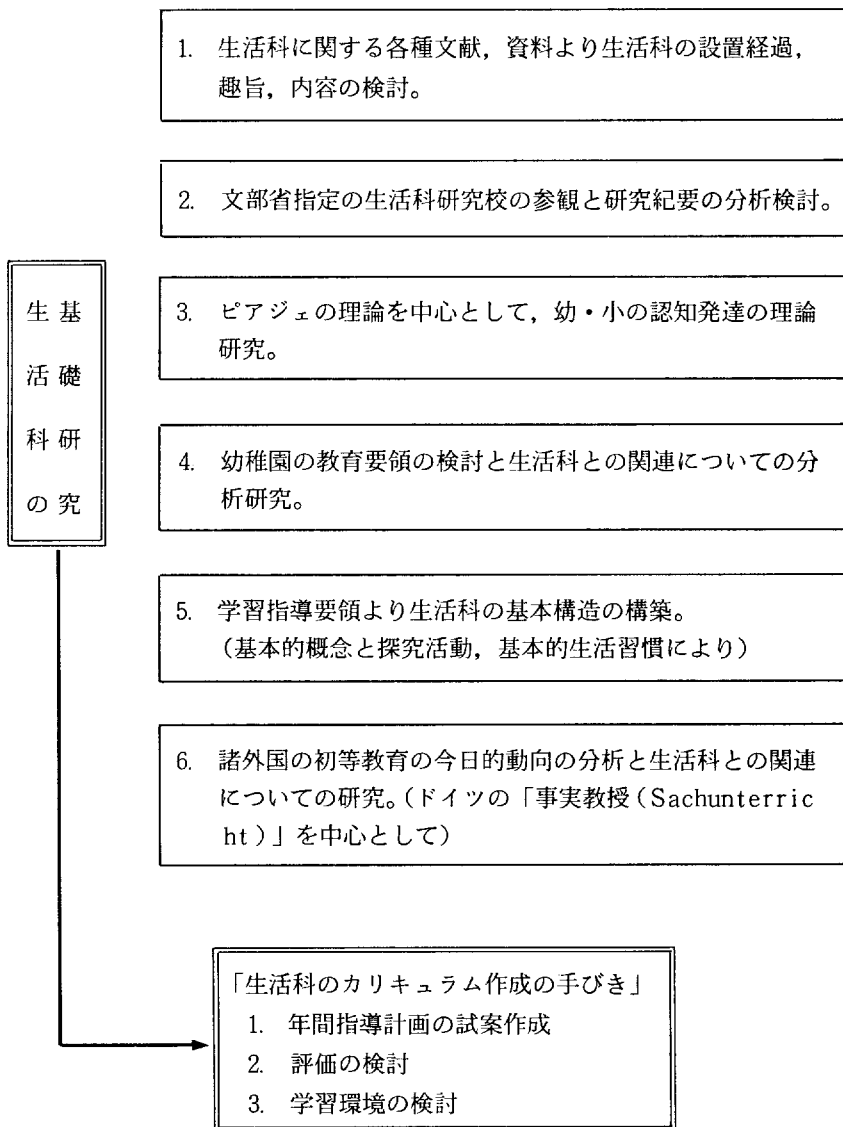
### II 研究のねらい

本研究会議では、次の内容について研究を進めた。

- 一つには、生活科の教科目標や学年目標から生活科の学習内容をどのように導き出すか考察した。
- 二つには、それらの学習内容を1年生から2年生へ発達段階に応じてどのように配列し、積み上げていったらよいか明らかにした。
- 三つには、生活科において児童の認知発達が大きく取り上げられている。そこで、ピアジェの理論を中心に児童の認知発達について考察し、生活科の指導の留意点を明らかにした。
- 四つには、生活科において幼・小の関連について重視されている。新幼稚園教育要領を中心に幼稚園教育について考察し、生活科との関係を明確にした。
- 五つには、諸外国における初等教育の今日的動向を概観し、中でも生活科が最も参考にしたと思われるドイツ（旧西ドイツ）の初等教育の教科の一つである『事実教授（Sachunterricht）』を中心に、生活科が学ぶべき内容について明確にした。
- 六つには、以上の知見をもとに、生活科の年間指導計画や具体的な展開、学習環境、評価などそれぞれの試案を作成し、生活科の学習指導の基本的な指針となるものを究明した。

### Ⅲ 研究の方法

文献を中心として生活科の特性を明確にする等の基礎研究を中心に行い、それらの研究をもとに作成した指導計画の試案により検証授業を実施し、さらに修正を加え完成度の高いものを作成する。



## Ⅳ 研究内容および考察

### 1. 小学校低学年児童の発達の特徴

#### (1) 発達段階のとらえ方

ピアジェは、思考の発達過程には4つの顕著な段階（Stage）があるという。それは、感覚・運動的段階、前操作的段階、具体的操作段階、形式的操作段階である。

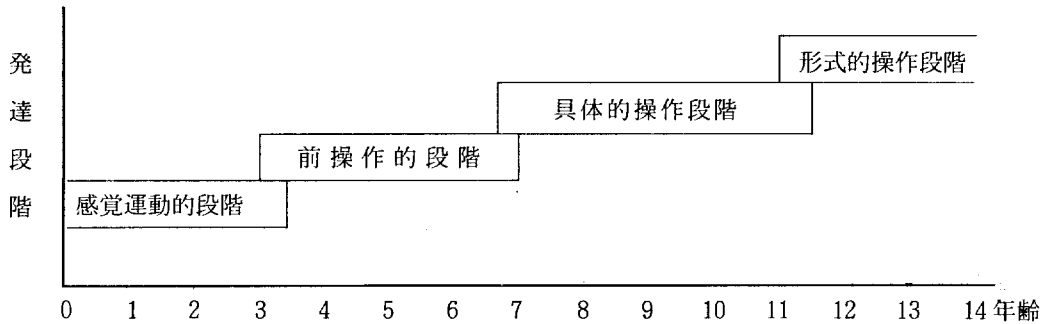


図1 思考の発達段階

それぞれの発達段階に現れる年齢は、人により、その国の教育水準、環境文化等により変動するものである。したがって上図に示されたものはおおよその目安と考えられる。しかし、人は感覚・運動的段階→前操作的段階→具体的操作段階→形式的操作段階といった4つの段階の順序によって発達し、途中で逆行したり省略して飛躍するようなことはないといわれている。

児童を指導する場合、これらの発達段階の特徴を十分に考慮する必要がある。生活科が実施される小学校低学年の発達段階は、前操作的段階から具体的操作段階へと発達段階が一段向上するちょうど橋渡しの時期である。この時期に生活科の学習が児童の発達に貢献できるようにしなければならないのである。

#### (2) 思考の特徴

##### ①行動しながら思考する

この頃の子どもは、目の前の具体的な事物や行動を通して思考し、抽象的な思考をすることがむずかしい。例えば、子どもに2つの事物を目の前に置き、それらの違いを指摘させるとある程度答えることができるが、実物を見せないで違いを答えることはむずかしい。

言語による思考過程にしても、言葉をはしながらかし考していることが多い。子どもの遊びを観察していると、無駄なおしゃべりと思われるほどよく言葉を出しながら行動している。このように、行動を通して思考していることが分かるのである。

##### ②自己中心性が強い

4～7歳頃までの子どもは、自分の立場からだけしか物事を見たり考えたりすることができず、他人の立場に立ったり、視点を交えて物事を見ることができない。このような子どもの傾向をピアジェは自己中心性と名付けた。自己中心性のために、アニミズム、人工論、実在論などの独得な世界観を示すのである。

ピアジェは、視点の移動を用いて子どもの自己中心性について調べた。下の図に示すような色・形の異なる3つの山の模型を台の上に前後左右に配置した。その台の上にB、C、Dの位置に人形

を置く。Aの位置に子どもを座らせ、人形の目から見える山の風景を子ども達に想像させて、前後・左右の関係を言わせるのである。

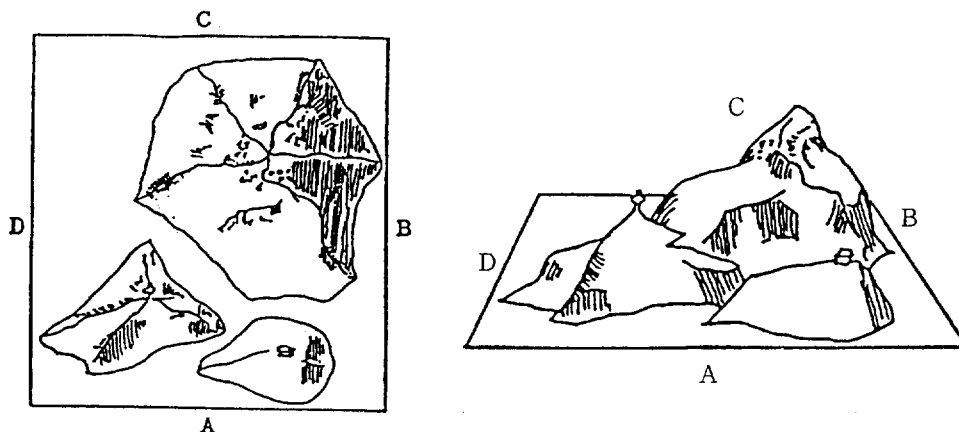


図2 三つ山問題

5～6歳以下の子どもは、人形をどこに置いても人形から見えるものではなく、自分の位置からみた風景しか答えることができない。これは、自己中心性の現れなのである。7～8歳ぐらいになると、左右だけあるいは前後だけ正しく答えることができるようになる。少しずつ自己中心性が脱却してきたのである。9～10歳頃になると、前後・左右という両方の関係を正しく関連づけて答えることができるようになる。すなわち自己中心性が脱却し、視点の移動が可能になるのである。

## 2. 思考の発達と生活科の学習指導

生活科の授業において、低学年児童の思考発達を考慮し、さらにその発達を促すようにするための効果的な指導を述べてみたい。

### (1) 自己中心性からの脱出のための指導

#### ①客観的な見方を高める

自己中心性は、前にも述べたように『自分の立場からだけしかものを見たり考えたりすることができず、相手が何を考えているのか、どんなことを思っているのかなど、相手の立場に立ったり、視点を変えてみることができない。』ということである。このように主観的な見方が中心になっている時期から徐々に客観的な思考ができるような指導が重要になってくる。

自己中心性の現れの一つであるアニミズムの思考について、発達心理学者の波多野完治、滝沢武久の両氏は「子どもものの考え方」（岩波書店）で次のように述べている。『アニミズムは禁止したって仕方がない。しかし、放っておいたり奨励したりするとそれは科学的な思考の成長を阻害する恐れがある。あくまでも客観を尊重しつつ行為していく態度を作り出していくのがよいのである。』このように、児童の客観的なものの見方を高めていくことは、生活科の学習指導にきわめて

重要なことであるといえよう。

#### ②多面的な見方を高める

自分が思い込みで見ている対象に対して、横から、上から、下からといった異なるいろいろな角度から視点を変えて見させることは、全体像をつかませることであり、視点の移動の訓練にもなるのである。対象を多面的に見せることは、自己中心性から抜け出すのに有効であろう。

#### ③生活経験を考慮する

低学年の児童は、論理だけで考えたり判断したりすることがまだ十分できない。したがって指導過程において、児童が日常経験の中で得た経験的な知識を十分に考慮することが大切になってくる。児童がさまざまな経験を出すことによって、自分だけの思い込みから一步離れたものの考え方が出されてくるのである。

#### ④疑問を大切にす

児童はいろいろな活動をしているとき、疑問に思ったことや不思議なことに対して、つぶやいたり、人に聞いたりすることがよくある。この様な活動が思考の第一歩であろう。児童一人ひとりの疑問を大切にすることは、児童の個性を認めることであり、学習内容に興味を持つきっかけになることでもあり、自己中心的な思考から脱出していききっかけにもなるのである。

### (2) 活動の充実

#### ①活動や体験を重視する

低学年児童は、具体的な事物や行動を通して思考することについてはすでに述べた。思考させるためには直接経験がきわめて大切である。文部省指導書「生活編」では、生活科が求める視点の中に『(1)具体的な活動や体験を通すこと。』とある。実際の授業では、具体物を十分与え、さまざまな体験や活動ができるようにすることにより、思考力を高めることができるのである。

#### ②表現を大切にす

一般に、言葉や文字による表現を重視する傾向がある。成人した大人のように言葉と思考が分化する前の子どもには、言葉や文字だけでなく、動作や絵による表現活動も必要になってくる。

## 3. 幼稚園教育と生活科

### (1) 幼稚園教育と小学校低学年との関連の強化

心身の発達に即して教育を進めるうえで、幼稚園と小学校低学年の連続性は必要である。しかし、わが国の教育制度では区切られている。幼稚園では、幼児一人ひとりの自由な選択活動に沿って遊びを中心とした総合的な教育が行われている。これに対して小学校では、教科に分けて一斉に指導するという傾向が強く、この間に大きな段差があった。この段差を解消するために、新幼稚園教育要領では、小学校教育との関連を考慮して次のような改善のねらいを示した。

#### ①人とのかかわりをもつ力を育成すること

#### ③基本的な生活習慣や態度を育成すること

これらを「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域で具体化し進めることとした。

一方小学校低学年では、見る・調べる・探す・作る・育てる・遊ぶといった具体的な活動や体験

を重視する生活科が新設されることによって、両者の円滑な接続が図られるようになった。

(2) 具体的な指導における関連

具体的な指導における関連について次のような項目が挙げられる。

- ①直接経験の重視
- ②主体的な活動の重視
- ③個性に応じた指導
- ④時間の弾力的な運用

4. 生活科の基本構造

(1) 全体構造

生活科の指導計画を作成するためには、生活科がどのような教科構造を持っているかを明らかにしなければならない。その参考になるものとして、生活科の学習指導要領、教育課程審議会答申、小学校低学年の教育に関する調査研究協力者会議の答申などが挙げられる。これらをもとに生活科の教科構造を作成してみた。

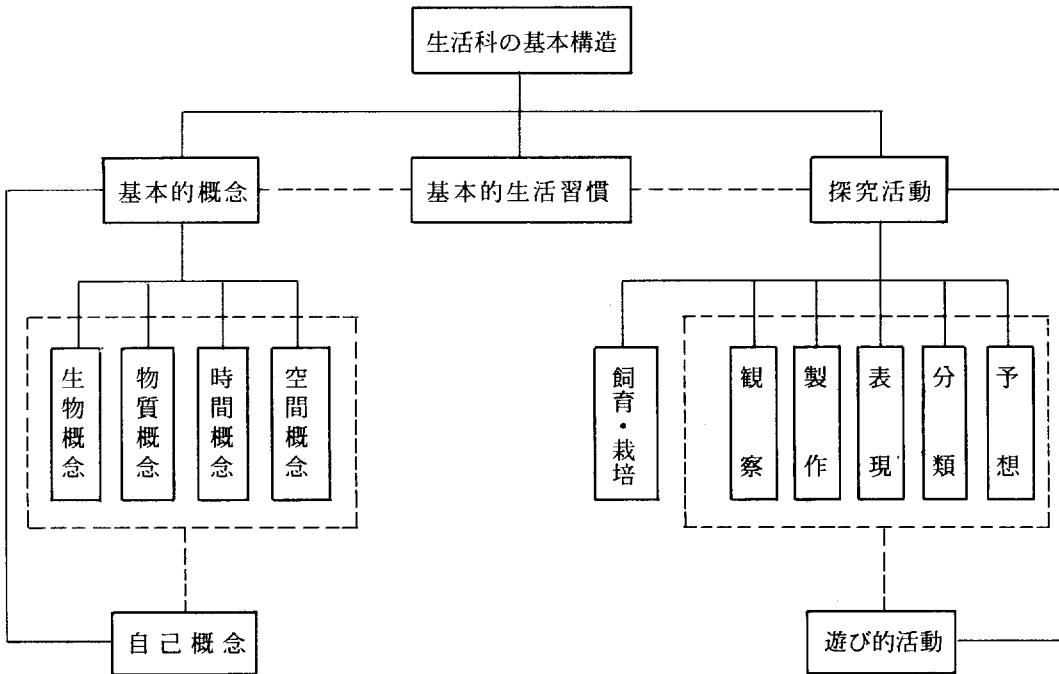


図3 生活科の全体構造



## (2) 5つの基本的概念

人間はこの世に誕生以来、周囲の環境に積極的に働きかけてきた。また働きかけられることもある。人間は環境との相互作用により心身を成長発達させている。環境は社会的環境（人的環境）と自然環境とに分けることができる。生活科は、『時間・空間を舞台にして、人という役者が自然環境や社会環境と深くかかわりながら自分自身のことや他の人のことを見つめる教科。』と言えよう。

さらに学習指導要領の内容を分析検討すると生活科は、大きく5つの基本的概念の基礎が導き出されるであろう。それは、『生物概念』、『物質概念』、『時間概念』、『空間概念』、『自己概念』である。以下具体的に述べる。

### ①生物概念

動物や植物を認識する上での必要な思考能力である。生活科では、「生物」を扱う内容について学習指導要領では次のようになっている。（下線部分を中心である）

#### 【第1学年の内容】

- (3) 近所の公園などの公共施設はみんなのものであることが分かり、それを大切に利用することができるようにするとともに、身近な自然を観察し季節の変化に気付き、それに合わせて生活することができるようにする。
- (4) 土、砂などで遊んだり、草花や木の実など身近なもので遊びに使うものを作ったりして、みんなで遊びを工夫することができるようにする。
- (5) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらも自分と同じように生命を持っていることに気付き、生き物への親しみをもちそれを大切にすることができるようにする。

#### 【第2学年の内容】

- (3) 季節や地域の行事にかかわる活動を行い、四季の変化や地域の生活に関心をもち、また、季節や天候などによって生活の様子が変わることに関心を持ち、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりすることができるようにする。
- (4) 身の回りにある自然の材料などを用いて遊びや生活に使うものを作り、みんなで遊びなどを工夫することができるようにする。
- (5) 野外の自然を観察したり、動物を飼ったり育てたりして、それらの変化や成長の様子に関心を持ち、また、それらは自分たちと同じように成長していることに気付き、自然や生き物への親しみをもちそれらを大切にすることができるようにする。

これらの内容をもとに生活科の生物に関する領域を構造図で表してみた。

「多様性と同一性」とは、身の回りにはさまざまな生物が存在する。これが多様性である。しかし、それらは形態や構造、機能などの共通点や類似点を基準としてみると、まとまりとして分類できるのである。これを同一性という。この考え方は、生物だけに限らずさまざまな物質に対しても応用できる幅広いものである。

生活科は1・2学年の目標が同じなので、生物に関する内容を構造化しておけば1・2学年の積み上げや深まり、3学年への継承発展が明確になるのである。

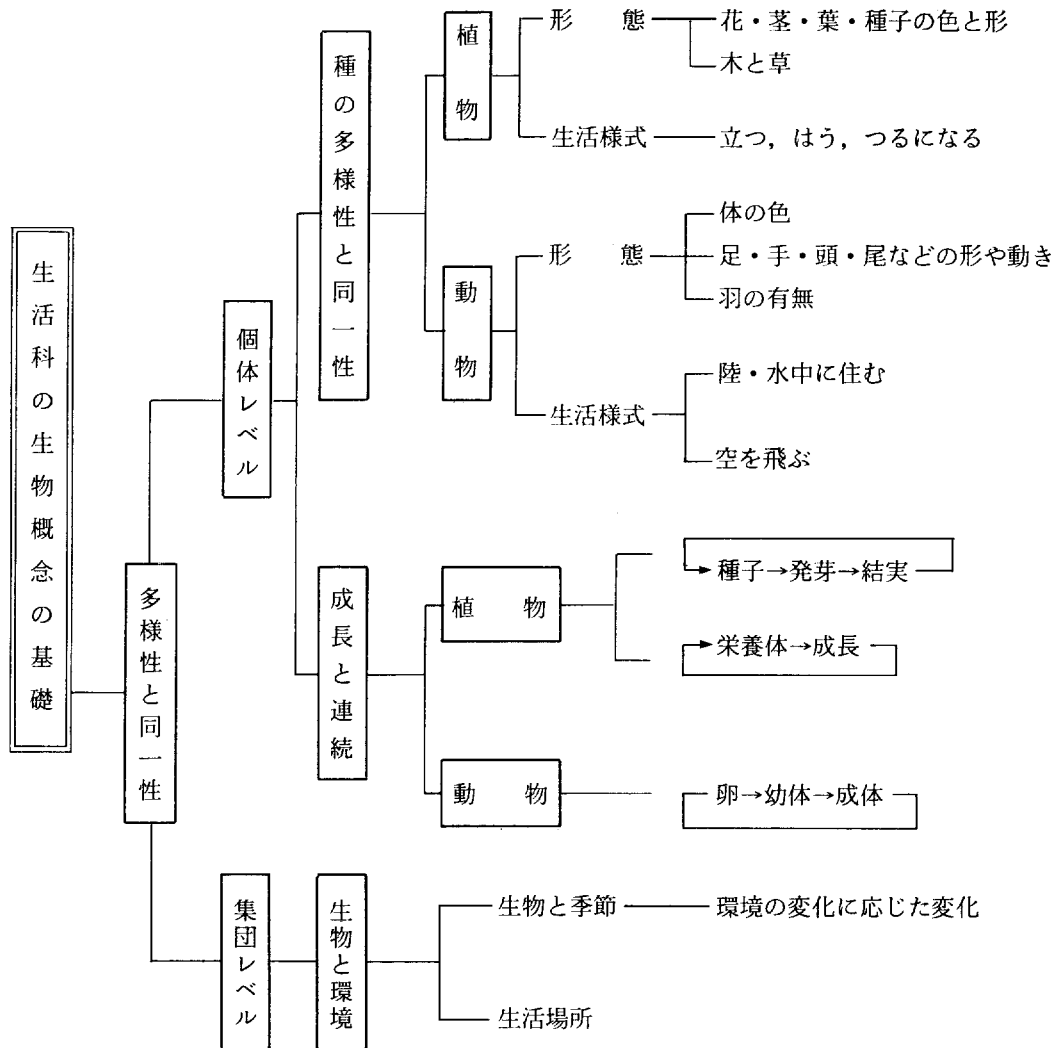


図4 生活科の生物概念の構造図

②物質概念

身の回りのさまざまな物質を認識する上で必要な思考能力である。生活科では、学習指導要領でもわかるように物質そのものを扱う内容は少なくなっている。気になる点である。

【第1学年の内容】

(4) 土、砂などで遊んだり、草や木の実など身近にあるもので遊びに使うものを作ったりして、みんなで遊びを工夫することができるようにする。

【第2学年の内容】

(4) 身のまわりにある自然の材料などを用いて遊びや生活に使うものを作り、みんなで遊びなどを工夫することができるようにする。

以上の内容から生活科の物質概念の基礎となる構造図を次のように考えた。

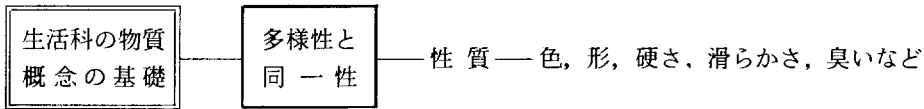


図5 生活科の物質概念の構造図

物質に関する学習は、生活科に限らずさまざまな学習の基礎になるものでありきわめて重要な概念である。生活科の授業で扱われる物質は、児童の身の回りで集められるものを中心となるであろう。例えば、ゴム、ひも、紙、空かん、空き箱、空き瓶、石、空気、水など、できるだけ多様なものを取り上げたい。身の回りのさまざまな物を扱ったり、観察したり、また遊ぶものを製作したりするなどの活動を通して物質概念の基礎が培われるであろう。

### ③時間概念

時刻や時間を認識する思考能力である。時間概念の初歩は、過去・現在・未来といった時の流れの理解である。生活科では、自分の成長や植物や動物の成長の学習の中で育成されるものと考え。生活科の学習指導要領では、時間概念にかかわる内容について次のようになっている。

#### 【第1学年の内容】

- (3) 近所の公園などの公共施設はみんなのものであることが分かり、それを大切に利用することができるようにするとともに、身近な自然を観察し季節の変化に気付き、それに合わせて生活することができるようにする。
- (5) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらも自分と同じように生命を持っていることに気付き、生き物への親しみをもちそれを大切にすることができるようにする。
- (6) 入学してから自分でできるようになったことや日常生活での自分の役割が増えたことがわかり、意欲的に生活することができるようにする。

#### 【第2学年の内容】

- (3) 季節や地域の行事にかかわる活動を行い、四季の変化や地域の生活に関心をもち、また、季節や天候などによって生活の様子が変わることに気付き、自分たちの生活を工夫したり楽しくすることができるようにする。
- (5) 野外の自然を観察したり、動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは自分たちと同じように成長していることに気付き、自然や生き物への親しみをもちそれらを大切にすることができるようにする。
- (6) 生まれてから自分の生活や成長には多くの人々の支えがあったことが分かり、それらの人々に感謝の気持ちをもち、意欲的に生活することができるようにする。

これらの内容をもとに、生活科の時間概念の構造図を次のように考えた。

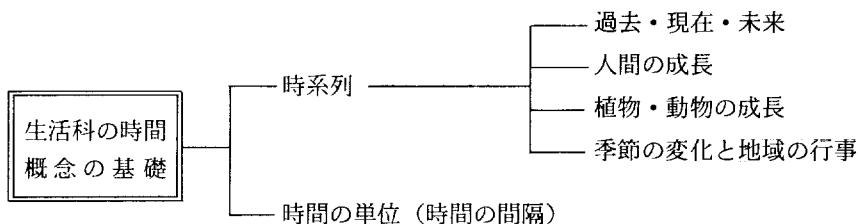


図6 生活科の時間概念の構造図

植物を栽培したり、動物を飼育するさまざまな活動において、それらの成長の変化が見られるが、そのとき、時間の経過についての意識を持たせることが大切である。さらに、1年を通しての季節の変化や自分が1年間でできるようになったこと、生まれてから現在までさまざまな出来事を振り返るとき、自分を支えてくれた人々への感謝の気持ちを持たせるだけでなく、そこには時間の経過というものが底流にあることも気付かせていくことも大事なことである。

地域の行事については、その地方によって季節や内容がさまざまであるので時間概念の中では季節の変化との関係を重視してここに入れたのである。したがって地域の行事は、時間的な変化だけの学習ではないことはいうまでもない。

#### ④空間概念

事物や現象の形や位置・方向・方位等を認識する思考能力である。日常生活においてもきわめて重要な認識である。生活科においては、自立の基礎を養うことがいわれているが、空間的な認識を形成させることはまさに生活科のねらうところである。生活科の学習指導要領では、空間的な内容は次のとおりである。

#### 【第1学年の内容】

- (1) 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、学校において楽しく遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子などについて調べ、安全な登下校ができるようにする。
- (3) 近所の公園などの公共施設はみんなのものであることが分かり、それを大切に利用することができるようにするとともに、身近な自然を観察し季節の変化に気付き、それに合わせて生活することができるようにする。
- (4) 土、砂などで遊んだり、草花や木の実など身近にあるもので遊びに使うものを作ったりして、みんなで遊びを工夫することができるようにする。

#### 【第2学年の内容】

- (2) 乗り物や駅などの公共物の働きやそこで働いている人々の様子が分かり、安全に気を付けてみんなで正しく利用することができるようにする。
- (4) 身の回りにある自然の材料などを用いて遊びや生活に使うものを作り、みんなで遊びなどを工夫することができるようにする。

これらの内容から生活科の空間概念の構造図を次のように考えた。

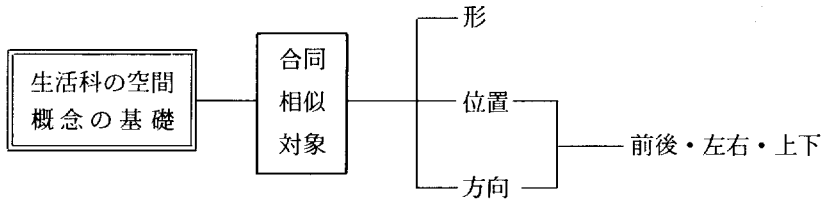


図7 生活科の空間概念の構造図

空間的なものの考え方は、自己中心性の強く残っている低学年の児童にとってきわめて大切な認識である。例えば、方向・方位の基準を自分自身から離して他の事物に移動して考える活動がある。すなわち「視点の移動」ができるようになるのである。また、生活科では自分自身を知るといった内容がある。自分自身を知るためには、自分を他の位置から客観的にみるといった観察能力が要求される。このように、空間概念の育成は、未分化な児童にとって自立への基本的な内容である。

#### ⑤自己概念

『小学校低学年の教育に関する調査研究協力者会議』の審議のまとめに教育界ではなじみの薄い「自己認識」という用語が用いられている。この用語は、心理学や教育学に関する事典では見つけることはできない。ただ、小学校低学年の教育に関する調査研究協力者会議のメンバーである梶田勲一氏によれば、自己認識について「自分自身を捉え直し、発達段階に見合った、きちんとした自己理解、自己規定を行うこと。」と定義している。文部省の高野教科調査官は、自己認識と自己概念とを同じことととらえている。本論においても自己認識と自己概念を同義語と考えていくことにする。

生活科では、社会認識や自然認識の芽を育てる活動の中で自己概念の基礎を培うことが求められている。わが国において自己概念を真正面から取り上げた教科は初めてである。

生活科の学習指導要領では自己概念の内容について次のようになっている。

#### 【第1学年の内容】

- (1) 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、学校において楽しく遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子などについて調べ安全な登下校ができるようにする。
- (2) 家庭生活を支えている家族の仕事や家族の一員として自分がしなければならないことが分かり、自分の役割を積極的に果たすとともに、健康に気を付けて生活することができるようにする。
- (6) 入学してから自分でできるようになったことや日常生活での自分の役割が増えたことなどが分かり、意欲的に生活できるようにする。

### 【第2学年の内容】

- (1) 自分たちの生活は近所の人や店の人など多くの人々とかかわっていることが分かり、日常生活に必要な買い物や使いをしたり、手紙や電話などで必要なことを伝えたりするとともに、人々と適切に対応することができるようにする。
- (2) 乗り物や駅などの公共物の働きやそこで働いている人々の様子が分かり、安全に気を付けてみんなで正しく利用することができるようにする。
- (6) 生まれてから自分の生活や成長には多くの人々の支えがあったことが分かり、それらの人々に感謝の気持ちを持ち、意欲的に生活することができるようにする。

これらの内容をもとに、生活科の自己概念の構造図を次のように考えた。

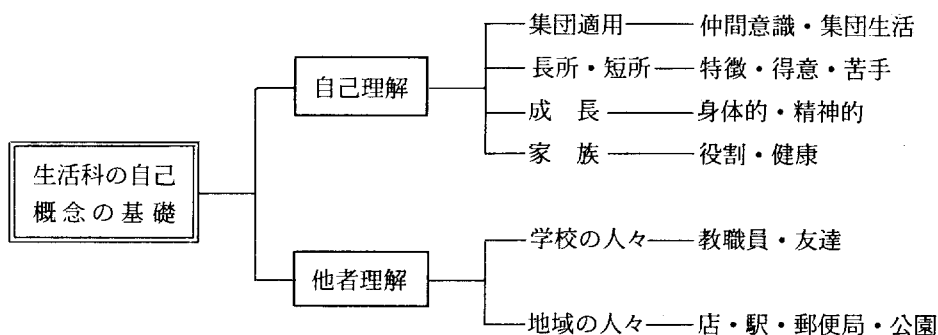


図8 生活科の自己概念の構造図

生活科の自己概念を定義すれば、『自分自身のことや自分の生活について客観的に見つけ、自分の長所や短所、得意なことなどを知るとともに、他の人についても理解する中で、自分の存在感や自信を持つ。』となるであろう。このような考え方は、アメリカのプラグマチズムやキャリア教育などときわめて似ており、参考にしたのであろう。

### (3) 探究活動

探究活動は、生活科の大きな柱の一つであり、単なる手段や方法でなく、それらは内容であり、方法であるとともに目標になるのである。生活科において、どのような内容の探究活動があるか分析し明らかにした。探究活動の中心的なものは、観察、製作、表現、飼育・栽培、分類、予想、遊びなどであろう。遊びについては、教科の中で初めて取り上げられたが、遊びそのものが内容となる場合と、観察や表現などをさせるときの手段と考える場合の二通りがある。

以下、それぞれ具体的に述べる。

#### ① 観察

科学は観察に始まり、観察で終わるといわれるように、観察力は、社会や自然の探究のみならず日常生活においても基本的な能力である。

## ②製 作

製作は、工夫しながら作り、試しながら作り直していくという思考と操作が一体となった活動である。物や道具の使い方を知り、創造性を育てるのである。

## ③表 現

表現活動は難易差により大きく二つに分けることができる。その一つは、児童が集めたさまざまな情報を自分だけのために言葉や図表で表しておくことである。独り言などこれに入るであろう。二つには、さらに進めて、集めた情報を取捨選択し、さらに整理し、それを第三者に伝えるための活動がある。いわゆる伝達である。順序を踏んで指導する必要がある。

## ④飼育・栽培

児童の自然離れが言われている。こうした児童の実態を踏まえて、飼育・栽培によって児童に動物や植物に直接触れる機会を与えることは大きな意義がある。

## ⑤分 類

分類は、多種多様な事物、事象あるいは考え方をいくつかの相似点や共通な点を基準として、小数の仲間に分けて整理することである。物を片付けるなどの活動は分類を行っているのである。日常生活においてあらゆる場面で絶えず用いられている。分類は自立の基礎の第一歩である。

## ⑥予 想

学校生活や日常生活で常に一步先を読んで行動することは、周囲の状況をよく考えることができるようになるので、自分自身の行動を正しく規定し、相手のことを考える余裕が生まれるのである。予想は、自立への基礎でもある。

## ⑦遊 び

遊びは、運動能力や認知能力、社会性などが発達し、情操を豊かにし情緒の安定をもたらすものである。

## 5. ドイツ（旧西ドイツ）の初等教育と生活科

ドイツは、あらゆることで目まぐるしい変化があり、世界中から注目を集めている。教育界も大きく変貌している。特に、初等教育において、かつて行われていた「郷土科（Heimatkunde）」に変わって「事実教授（Sachunterricht）」が登場した。この教科（小学校1～4学年まで）がどのような改革のもとで設置されたのか、目標や内容、教科書はどのようなになっているのか等を分析検討し、わが国の生活科と比較検討することは、よりよい生活科を作り上げるうえできわめて有意義であり、貴重な示唆が得られるであろう。

### (1) 事実教授の内容

事実教授は二つの学習領域から編成されている。一つは社会・文化的領域で、他の一つは自然・技術領域である。

健康・性教育は両方にわたっている。

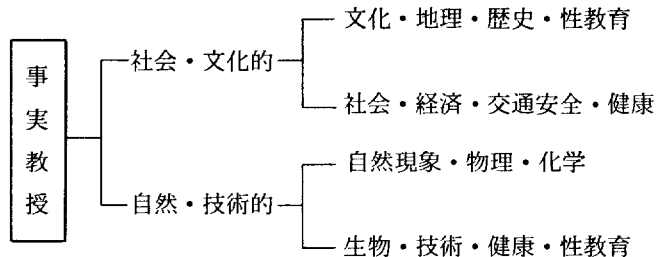


図9 事実教授の内容

## (2) 事実教授から生活科が学ぶこと

生活科の授業を進めるにあたって、事実教授から学ぶ内容は多々あるが、主なものは次の通りである。

- ① 単元における目標の行動目標による明確化。
- ② 対象へのアプローチの仕方の指導。
- ③ 「遊び」の基本的な考え方。
- ④ 性教育、健康教育の充実。
- ⑤ 学習と日常生活との関連の重視。

## 6. 生活科の指導計画作成の基本

### (1) 指導計画作成の基本方針

生活科の指導計画作成にあたって、つぎのことに留意する必要がある。

- ① 生活科の目標・内容を理解する。
- ② 学校や地域の実態を理解する。
- ③ 児童の実態を理解する。
- ④ 活動や体験を重視する。
- ⑤ 多様な人に学ぶ活動を取り入れる。

### (2) 教材研究の視点

教材を分析し、検討するには何らかの基準が必要である。この基準が明確でないと教材そのものの教育的価値がハッキリしなくなるであろう。生活科では、新設されたばかりの教科であるため、教材研究の視点がいま一つ明確になっていない面もある。ここでは、生活科の教材研究の視点について明らかにした。

生活科の教材研究は、次の二点が考えられるであろう。一つは、教材自身が持つ科学的分析である。科学的な分析の中には、前に述べたように5つの基本的概念の基礎と基礎的な探究活動である。

二つには、児童の実態把握である。

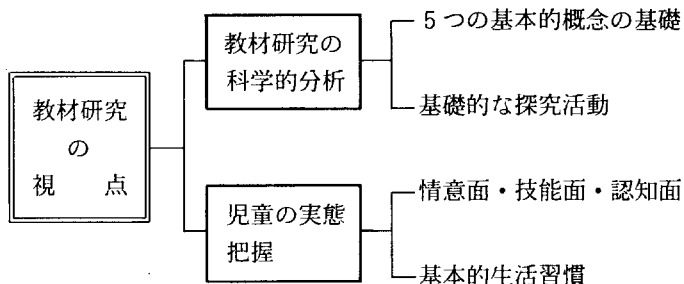


図10 教材研究の視点

## 7. 生活科の評価

### (1) 行動中心の評価

生活科は、ただ単に知識として覚えるのではなく、具体的な活動や体験を通して、自立の基礎を養い、よき生活者としての能力、態度を育てることである。

したがって、評価においても、児童の行動を中心としてさまざまな場面で行う必要がある。その



ためには、指導目標（特に本時目標）を立てるとき、できるだけ児童の観察可能な行動やふるまいを示す用語で表現することが重要になってくる。いわゆる行動目標にすることである。生活科では、『～に親しむ。』『～に気付く。』といった情意的や感覚的な言葉での目標になりがちであるが、これでは評価することが難しくなるであろう。児童が、どのような行動をしたら親しんだと言えるのかといったことをあらかじめ明確にしておくことが大切であろう。

このように、授業によって達成される目標や成果が児童の観察可能な行動で書き表すことによって、児童は目的意識を、教師は学習指導を進める際に取りべき行動の適切な判断ができ、評価もしやすくなるであろう。

## (2) 評価の視点

生活科の評価の視点として次の内容があげられる。

### ① 関心、意欲、態度

様々な活動や体験への関心、意欲、態度についての評価である。

### ② 思考、判断、表現

自分たちが行ったいろいろな活動や体験についての思考、判断、表現についての評価である。

### ③ 知識、理解

身近な環境や自分への気付きについての評価である。

## 8. 生活科の年間指導計画の展開例

これまでに得られた知見をもとに、第1、2学年の生活科の具体的な年間指導計画の試案を作成した。この指導計画案は、2名の研修員が一部実践を行い修正したものである。

ここでは、その紙面の関係により一部を掲載する。

第一学年 生活科 年間指導計画一覧

○の中の数は時数 38週 102時間

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
週数	3 ㉑	4 ㉒	4 ㉓	3 ㉔	4 ㉕	4 ㉖	4 ㉗	3 ㉘	3 ㉙	4 ㉚	2 ㉛	
週時数	2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3	2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3	3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	3 3 1 2 3 3 3 3 3 3 3 3	4 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	4 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	4 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	4 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	2 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	
週記	[1] 私の学校 ㉜	[2] 公園へ行こう ㉝	[3] 生き物を育てよう (2) ㉞	[4] 土や砂で遊ぼう ㉟	[5] 秋をさがそう ㊱	[6] 私の家族 ㊲	[7] 作って遊ぼう ㊳	[8] 私の一年間 ㊴				
記	生き物を育てよう ㉞											
時												
数												
育てる動物・植物	アサガオ 野菜 (ネギ、ハ) など 球根 ワサギ 金魚											

第二学年 生活科 年間指導計画

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
時数	3 ④	4 ④	4 ④	3 ④	4 ④	4 ④	4 ④	3 ④	3 ④	4 ④	2 ④
週時数	2 3 3	2 2 2	3 3 3	3 3 3	2 3 3	3 3 3	3 3 3	2 2 2	3 3 3	3 3 3	2 2 3
週配	[1] 春のまちに 出よう ④	[3] まほうを 使う ④	[2] 生き物を 育てよう(1) ④	[4] のりものに のろう ④	[5] 生き物を 育てよう(2) ④	[6] おもちやで 遊ぼう ④	[7] しゅうかくを 楽しもう ④	[8] 郵便局を ひらこう ④	[9] 冬を 楽しもう ④	[10] 大きくな った私 ④	
1											
2											
3											
育てる動物・植物	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ	ヒヨコ ミミズ ワケザル 球根 ウサギ タネ

月	単元名	単元の目標	基本的概念	探究活動	主な学習活動	指導上の留意点・備考
4月	■私の学校 ⑮ 1. 新しい友達 ③	○学校には先生方や友達など、多くの人々が一緒に生活していることが分かる。	○自己概念 ・自己理解 (場所、短所) ・他者理解 (学校の人々)	○表現 ○製作	○自分の名刺を作る。 ・名前、好きな食べ物、好きなスポーツ、小学生になってやってみたいこと、など ○自分で作った名刺をもとに自己紹介をする。 ○発表したことに質問をする。	○画用紙半分程度の大きさに書かせ、下に自分の名前を書かせる。 ○画用紙の裏に発表する内容のメモを書かせる。 ○教師も児童と同じように自己紹介をする。
	2. 学校めぐり ⑩	○学校のいろいろな施設や設備があることが分かり、それらを活用することができる。	○空間概念 ・位置 ・方向	○観察 ○表現 ○予想 ○製作	○学校の施設やいろいろな教室を全員で見回り、簡単な校舎配置図に記入する。 ○どんな教室や施設があったか、またどの様子が動いていたかか発表する。 ○もう一度行つてみたいところを発表する。 ○グループで校舎内の位置やどんな物があったか確認する。 ○どんな所を回つてみたか、おもしろかったことや驚いたこと、また興味を持ったところなど発表する。	○簡単な校舎配置図をわたり、見て回つたところにはシールを貼らせる。 ○見て回っているときに会った人のことについても聞かせせる。 ○全員で回った後、2、3人のグループで更に詳しく調べたいところやもう一度行つてみたい教室などを中心に探検させる。
4月		○校庭の植物や飼育されている動物に接することにより、身近な生き物に関心をもち、関心をもつことができる。	○生物概念 ・種の多様性 ・同一性 (形態、生活様式)		○校舎外の施設や花壇、校庭にある植物などを中心に全員で見回り。 ○見て回りながら、それらの位置やどんな物かを確認しながら校庭配置図にシールを貼る。 ○飼育舎の位置と動物の種類を確認する。 ○飼育舎の外に出せる動物については直接触れる。	○校庭の散歩程度に考え、ゆつくり回らせる。 ○簡単な校庭配置図を渡し、自分の場所や観察しているものがどこに位置しているのか確認しながらシールを貼らせる。 ○見ているだけでなく、触ったり抱いたりして動物の温もりを感じ取らせる。 ○細かい観察や餌やりなどの活動は次の単元で学習するのでここでは深いきりしない。 ○クラスで大きな校庭配置図を用意し、それに調べてきたものを記入させる。
月					○校庭の植物や動物、施設など確認してきたものにどんなものがあったか発表する。 ○校庭にある植物や飼育舎にいる動物をもとにして、カードを作る。 ・カードは、前もって点線で下書きしてあるものを使い色塗りをする。	○校庭に咲いている草花や飼育舎の動物のカードを用意しておく。 ○一人何種類かのカードを作らせる。

## V まとめと今後の課題

幼児や児童の認知面における発達の特性和幼稚園と小学校との学習指導の関連、生活科の基本構造の明確化、諸外国の初等教育と生活科との比較検討などさまざまな角度から生活科という教科の本質をさぐってきた。そのことにより、指導計画を実際に作成する場合、この單元にはどのような基本的概念や探究活動などが含まれているのかが明確になり、児童に何の能力を育成していくのかといった単元の教育的価値すなわち指導方針が明らかにできるのである。指導方針が決まれば目標を立てることができ、おのずと何を評価したらよいのかが決まってくるのである。現在はこれらの研究で得られた知見をもとに、具体的な指導計画の試案や評価の方法などを確立し、実際の授業で検証しているところである。

今後はさらに実践授業を通して、指導計画や評価、学習環境などより良いものへと再構成を行い、平成4年度から実施される生活科の授業に役立つものにしていきたい。

### 【主な参考文献】

- (1) 「ピアジェの認識心理学」波多野完治 国土社 1965年
- (2) 「児童心理学講座4. 認識と思考」須賀恭子 金子書房 1976年
- (3) 「ピアジェ理論と幼児教育」カミイ、デブリース チャイルド社 1986年
- (4) 「生活科構想と具体化」武村重和・梶田叡一他 啓林館 1988年
- (5) 「西ドイツにおける事実教授の教科書分析」天野正治 学事出版 1980年
- (6) 「自己認識・自己概念の教育」梶田叡一他 ミネルヴァ書房 1988年

### 【指導助言】

- 高岡浩二 文部省初等中等局小学校課教育課程企画官  
栗田一良 聖セシリア女子短期大学教授（前横浜国立大学教授）